

## 参謀本部駿河台分室

— 知られざる最後の3人の捕虜から見えてくる側面 —

佐久間 美羊

### The Last Three Unknown Internees of the Bunka Camp and Their Activities

Miyo SAKUMA

#### Abstract

This paper re-examines the propaganda activities at the Bunka Camp. The Bunka Camp was set-up by the Japanese Army during the Second World War with the aim of creating propaganda programs by engaging the POWs in the process. Post war memoirs and narratives about the Camp were told from the Japanese side and their focus was on the programs called “Zero Hour” and “Hinomaru Hour”. However, it is impossible to understand the whole picture of the Camp activities from these narratives because none of these authors, either civilian or military, were involved in the making of the programs across the entire period of the camp's existence.

This paper pays attention to the last three POWs who were brought into the camp three months before the end of the war. They were not documented in the official Japanese records. By disclosing the stories of the three POWs, new programs other than the ones previously mentioned will be brought to light. In addition, the attitudes of the POWs towards the propaganda activities will be revealed. This research is essential in order to understand the Bunka Camp, not only from the Japanese perspective, but also from the perspectives of the POWs<sup>1</sup>.

Key-words : Bunka Camp, POW, propaganda activities

#### 1. はじめに

2018年春、ある各種学校がその歴史に幕を閉じた。文化学院である。1921年に与謝野晶子夫妻らと共に西村伊作が創立した文化学院は、戦時期を参謀本部駿河台分室として使用された過去を持つ。表札に「駿河台技術研究所」と掲げられた駿河台分室<sup>1</sup>では、その後、連合軍捕虜らを使って謀略放送活動が行われる。

本稿はこの駿河台分室で連合軍捕虜らを使って行われた謀略放送活動を再考することを目的とする。駿河台分室とそこで捕虜たちが制作に携わった短波ラジオ番組に関しては、戦後多くの言説が交わされた。特に、「ゼ

ロ・アワー」という番組に捕虜らと共に関わった日系二世のアイバ戸栗ダキノが、「東京ローズ」として戦後米国で反逆罪に問われた際には多くの注目を集めた<sup>2</sup>。また、日本側の関係者も戦後多くの記録を残している。参謀本部関係者や、スタジオとなった社団法人東京放送局（JOAK、現在のNHKの前身）関係者等がそれぞれの立場から回顧録等を残している。しかし今回、筆者はオーストラリアとアメリカに所蔵されている記録を中心に、分室に最後に収容された3人の捕虜の存在、そして日本では戦後注目されてこなかった「ゼロ・アワー」や「日の丸アワー」以外の番組に注目するとともに、捕虜の視

1 日本人職員は「分室」と呼んでいた。連合軍捕虜たちは「Bunka」などと呼んでいたことから、戦後は「文化キャンプ」として知られていく。  
2 ドウス昌代、『東京ローズ 反逆罪の汚名に泣いた30年』、サイマル出版会、1977などが詳しい。

点から謀略放送を理解することを試みたい。

なお、駿河台分室の成り立ちや捕虜たちの生活面等収容所としての全体像については2020年発行予定のすいれん舎『捕虜収容所・抑留所事典（仮称）』の筆者担当「参謀本部駿河台分室」（「文化キャンプ」）に譲るものとする。

## 2. 先行研究とその限界

参謀本部駿河台分室は1943年11月3日に対敵謀略センターとして開設され、同年12月1日に捕虜14人を収容、1945年8月23日に捕虜たちが大森収容所へ移動することで幕を閉じる。分室は捕虜が寝食をする生活の場であると同時に、番組制作という労働の場として機能した。

駿河台分室の実態はどのようなものであったのか。戦時中に日本国内に設置された捕虜収容所に関しては、戦後、連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）法務局調査課により、それぞれの報告書がまとめられた。一方、駿河台分室に関しては、捕虜を収容していたものの、報告書は作成されていない。1945年9月20日に、米第八軍第十一軍団CICガイッシー<sup>3</sup>中尉が陸軍省に元参謀本部第二部第八課長永井八津次少将を訪れ、事情聴取を行っているが、永井は分室の現場に直接携わっていたわけではないため、その情報は正確さに欠く部分がある。一方、分室に関する証言者は多数おり、記録も多く残っている。日本側関係者の回顧録に加え捕虜が戦時中に密かにつけていた日記、或いは戦後自国に帰った際反逆罪に問われた捕虜たちの裁判<sup>4</sup>などで駿河台分室での活動が明らかになっていく。しかし、それぞれの立場によって一つの出来事をとっても解釈が全く異なる。日本側は「やれることはやった」という自己保身の論や「知らない」といった証言、捕虜側は「自分たちはこれほどひどい目にあった」等と乖離が見られる。

日本側関係者が回顧録を公にし始めた発端は、1978年に始まる。この年は捕虜らと共に「ゼロ・アワー」と

いう番組に関わり、「東京ローズ」と呼ばれた日系二世のアイバ戸栗ダキノがフォード大統領によって特赦を受け、米国市民権を回復した翌年にあたる。上坂冬子は『中央公論』1978年1月号に元捕虜であるニコラス・シエンクラへの取材を通して「対米謀略放送の裏をかいた男」として発表した。そこでは、「食料不足で捕虜は猫を食べた」や「捕虜たちに女を与える特別室が用意された」などが露わにされた。これらへの反論を込めて、まず、参謀本部第二部第八課の宣伝主任であった恒石重嗣中佐が『大東亜戦争秘録—心理作戦の回想』（1978）を出版し、第二次世界大戦時の情報戦の全体像を示すと共に作戦の妥当性と有効性を示した。なお、恒石は1945年6月に参謀本部を離れているため、終戦間際の記述はない。また、駿河台分室放送部の主任であった池田徳真が、捕虜の選定や「日の丸アワー」の原稿作りに携わった様子を『日の丸アワー』（1979）で詳述しており、分室発足から4か月余りに関しては詳細に渡って知ることができる。しかし、池田は1944年2月28日に一度解任され、1945年6月15日に再び駿河台分室に戻ってきているため、分室が開設されていた期間全てについて把握しているわけではない。むしろ、池田が不在であった期間の方が実は長い。なお、上記2冊は、恒石が池田から資料提供をうけていることから、記述には共通性が見られる。

さらに、陸軍中尉で1944年3月まで駿河台分室の警備にあたった濱本純一が、自身の半生をしたためた『青雲白雲 私の人生劇場』（1986）を出版した。濱本は恒石や池田と違い、捕虜らと分室に寝泊まりをしている点が特徴的である。また、分室の職員であった村山有が『終戦のころ—思い出の人々—』（1968）、番組制作に携わったJOAK（現NHK）の並河亮が『もうひとつの太平洋戦争 戦時放送記者がいま明かす日本の対外宣伝戦略』（1984）を記し、駿河台分室についても触れている。

これらを網羅的に読み解き、また恒石や池田へのイン

3 恒石は「ガイシー」と記載。

4 捕虜側ではチャールズ・カズンズ（オーストラリア）、ジョン・ディビッド・プロボア（アメリカ）、マーク・ストリーター（アメリカ）の3名が反逆罪の容疑に問われた。また、捕虜ではないものの、アメリカの日系二世アイバ戸栗ダキノの裁判には駿河台分室の多くの捕虜や日本人関係者が証言にたった。なお本稿では、Cousensは本来の発音からカズンズと表記する。彼らの裁判についてはIvan Chapman, *Tokyo Calling*, Hale & Iremonger, 1990. やJudith Keene, *Treason on the Airwaves: Three Allied Broadcasters on Axis Radio during World War 2*, University of Nebraska Press, 2010.が詳しい。

タビューを行った名倉有一が『駿河台分室物語』としてまとめている。しかし、捕虜による一次資料に限られている点は否めない。

以上を総合すると、分室が開設されてから閉鎖されるまでの全ての期間に携わっていた日本側関係者の記録はなく、今まで語られてきた駿河台分室は、分室発足当初に作られた番組である「ゼロ・アワー」や「日の丸アワー」に関する言説が中心になっている。本稿では、アメリカ国立公文書記録管理局（NARA）、オーストラリア戦争記念館（AWM）、オーストラリア国立公文書館（NAA）、さらに国会図書館憲政資料室の資料を中心に、主に以下の3点について明らかにしていきたい。まず次節で、今まで明らかにされていなかった新たな収容捕虜について明らかにしていく。次に、それら新たな収容捕虜によって制作されていた番組、さらに、その他の新たな番組、すなわちオーストラリア向けの番組についても明らかにしていく。最後に、謀略放送に関わっていた捕虜の意識について述べる。以上3点から、今までの謀略放送を巡る言説とは新たな視点を投げかけたい。

### 3. 収容捕虜：既知の人数との食い違い

1943年にはいり、米国に残されている出征兵士の家族など米国民向けの放送が重要視されていく。恒石は参謀次長電をもって、各軍を通じて捕虜収容所から宣伝に適任の捕虜候補者を選定し、経歴などを記載した名簿を提出するよう指示を出す。その後、名簿から選出された者たちが大森収容所へ送られる。そして池田がそれらの捕虜と面談をし、恒石と共に第一陣の14人を選出の後、分室に収容した。その後も追加で捕虜が補充されていく。

筆者は今回の調査により、収容捕虜について以下のように結論づけた。（詳しくは【表1 駿河台分室に収容された連合軍捕虜一覧】を参照。）

1943年12月1日、大森収容所より14人（アメリカ人9人、イギリス人3人、オーストラリア人1人、オランダ人1人）を収容。

1943年12月10日、イギリス人1人が協力を拒否したた

め追放。

1943年12月18日、山王ホテルより2人（アメリカ人1人、オーストラリア人1人）を収容。

1944年1月7日、4人（アメリカ人3人、イギリス人1人）を収容。

1944年3月28日、アメリカ人1人を追放。

1944年7月7日、アメリカ人6人を収容。

1944年9月7日、オーストラリア人1人を収容。

1945年5月17日頃、アメリカ人3人を収容。

終戦時収容人員28人。なお、彼らは終戦後の8月23日に大森収容所へ移動させられたため、解放時には大森収容所の収容者として記録されている<sup>5</sup>。

始めの14人は、新たに制作される「日の丸アワー」のために集められた14人である。池田が面接しているものの、『日の丸アワー』の中で「姓名、年齢、職業などの細かい点にはだいたい間違いのあることを前提にして、次のリストを作成してみた」（池田 1979:66）としている通り、正確さに欠けている部分がある。その後既に「ゼロ・アワー」の制作に携わっていた2人が収容、さらに4人が補充される。1月に収容された4人のうち1人（ウィリントン・コックス）は少佐であり、番組制作のためではなく、収容所での捕虜側のまとめ役になるべくして連れてこられたと見られる。その後7月には南部向けスペイン語放送を目途にスペイン語を話す捕虜2人（ジミー・マルティネスとレイモン・マルティネス）を含む6人が、9月には体調不良のオーストラリア人（カズンズ）を補う形で新たなオーストラリア人1人（ジョン・ドゥーリー）が収容されている。池田は1944年2月28日から1945年6月15日まで駿河台分室を離れていたため、この間の記述が『日の丸アワー』にはない。そのため、1944年2月以降に関しては、捕虜たちが戦時中に密かに書き記していた日記等から明らかになったものである。フランク・フジタによる*FOO* (1993)、及び、ハーバート・ヘンショーによる記録がそれらにあたる。*FOO*は刊行されているため、広く知られている一方、ヘンショーの証言は一部が*The Hunt for 'Tokyo Rose'* (1990) に収録

5 “Tokyo Main Camp Oomori.”

されている他、日記がNAAに所蔵されている。フジタは兵卒であるが、ヘンショーは将校であったため、それぞれの視点や入手情報は同じ分室内にいても異なっている。この2人の捕虜の日記に興味深い箇所がある。

まず、*FOO*の以下のような記述である。(下線は筆者による。)

“Ten new POWs were brought in. Two of them died, one just after they arrived here. Seven of the new men were moved to another building a block or two from here. Three were left there in the front building with

Streeter.” (Fujita 1993:279)

また、NAA所蔵のヘンショーの日記では以下のように記録されている。

“eleven men were originally sent here to produce Streeter’s program. But while they were confined in the Japan administration building, one man died. After that the Japs sent seven back to regular work camps. Three were kept.” (Lt Commander George Herbert Henshaw’s diary)

【表1 駿河台分室に収容された連合軍捕虜一覧】

先行資料との比較

	収容日	名前	国籍	『日の丸アワー』	<i>FOO</i> 及びヘンショー証言 ( <i>The Hunt for Tokyo Rose</i> 収録)	<i>POWs at Camp Bunka, List of</i>
1	1943/12/1	マックノートン	イギリス	マックノートン	McNaughton	McNaughton
2		カルプフライシュ (~1944年3月28日)	アメリカ	カルプフライシュ	Kalbflesch	Kalbfriesch
3		ヘンショー	アメリカ	ヘンショー	Henshaw	Henshaw
4		ウィリアムズ (~1942年12月10日)	イギリス	ウィリアムズ	Williams	Williams
5		プロボ	アメリカ	プロボ	Provoo	
6		ストリーター	アメリカ	ストリーター	Streeter	Streeter
7		クイレ	アメリカ	クイレ	Quille	Quille
8		ブルース	イギリス	ブルース	Bruce	Bruce
9		パーキンス	オーストラリア	パーキンズ	Parkyns	Parkyns
10		シャトルズ	アメリカ	シャトルズ	Shattles	Shattles
11		フジタ	アメリカ	フジタ	Fujita	Fujita
12		シェンク	オランダ	シェンク	Schenk	Schenk
13		ライト	アメリカ		Light	Light
14		アスタリータ**	アメリカ		Astarita**	Astarita**
				ドゥリー*		
15	1943/12/18	カズンス	オーストラリア	カズンス	Cousens	Cousens
16		インス	アメリカ	インス	Ince	Ince
17	1944/1/7	コックス	アメリカ	コックス	Cox	Cox
18		ワイズナー	アメリカ	ワイズマン	Wisener	Wisener
19		リカート	アメリカ	リカート	Rickert	Rickert
20		ピアソン	イギリス		Pearson	Pearson
				アストリータ**		
21	1944/7/7	スミス	アメリカ		Smith	Smith
22		オデュリン	アメリカ		Odlin	Odlin
23		ホブリット	アメリカ		Hoblitt	Hoblitt
24		ジミー・マルティネス	アメリカ		Jimmy Martinez	Jimmy Martinez
25		レイモン・マルティネス	アメリカ		Ramon Martinez	Ramon Martinez
26		ドッズ	アメリカ		Dodds	Dodds
27	1944/9/7	ドゥリー*	オーストラリア		Dooley*	Dooley*
28	1945/5/17頃	アンドリュース	アメリカ			Andrews
29		グレイザー	アメリカ			Glazier
30		タニクリフ	アメリカ			Tu(n)nicliffe

\*と\*\*はそれぞれ同一人物と見られる。

このように、「3人が収容された」との記述があるが、その正体は明らかにされていない<sup>6</sup>。駿河台分室には捕虜が使用する棟と日本人が使用する棟の2棟が中庭を挟んで向かい合って建っており、3人は日本人が使用する棟に収容されていたのである。何人かの捕虜たちが日本人の棟に忍び込み、3人のうちの1人がアンドリュースだと明らかになったことがヘンショウの日記に記されているに留まる。

この3人は誰なのであろうか。上記2人の日記から、「ストーリーター」が鍵を握っているとみられる。NARAに保存されているアメリカ人捕虜ストーリーターのファイルを調べると、3人の正体が明らかになった。ストーリーターはルーズベルトに対する批判を公言し<sup>7</sup>、他の捕虜から日本に協力的だと見られ、対立していた。1945年8月22日駿河台分室内で、同じく捕虜であったコックス少佐に逮捕され、巣鴨刑務所に入れられたのち調査を受ける。1946年6月に釈放されるものの、米国帰国後も捜査を受けており、このファイルにはストーリーターの容疑の捜査に使用された資料が残されている。その中の一つが「POWs at Camp Bunka, List of」という資料であり、恐らく証言を取るためとみられるが、捕虜の名前と住所がリスト化されている。そのリストに“3 additional civilian POWs”としてアーサー・デイル・アンドリュース、ミルトン・グレイザー、ジョン・タニクリフの3人の名前が記されていた。なお、このリストには第一陣の14人に含まれているプロボウの名前がない。プロボウは戦前日本で日蓮宗を学び、「日の丸アワー」の司会者も担当していたが、戦後、日本軍の協力者として分室内でコックス少佐に逮捕され巣鴨刑務所に入れられる、というストーリーターと同様の道を経ている。そのため、このリストからは外れた可能性がある。また、国立国会図書館憲政資料室にあるストーリーターの資料にも上記3人について記述があった。巣鴨拘置所記録によると、ストーリーターは連合軍捕虜は30人で、うち22人がアメリカ人であった、

と供述している。さらに、連合国最高司令官総司令部法務局文書には、ストーリーターの所有物である黒いノートに、日本の紙幣、絵、雑多なメモ、アーサー・デイル・アンドリュース、ジョン・エドワード・タニクリフ、ミルトン・アルバート・グレイザーからの委任状が含まれていた、との記録がある（Mark Streeter）。ストーリーターは他の捕虜と折り合いがつかず、既に1944年11月から敷地内の日本人棟に移されていた。3人はストーリーターがいた別棟に収容されたため、他の捕虜らの記録から名前が漏れていたのである。なお、3人のうちグレイザーは、アイバ戸栗ダキノの戦後裁判の証言に立ち、1945年5月から8月23日まで「文化キャンプ」にいたことを証言している<sup>8</sup>。なぜこの時期にこの3人が収容されたのかは次節で述べることにする。

#### 4. 新たな番組：オーストラリア向け番組とストーリーターらによる番組を中心に

前節では最後に収容された3人の捕虜を明らかにした。本節では、まず、駿河台分室の捕虜たちによって制作された番組を挙げ、さらに、今まで注目されていなかったオーストラリア向けの番組について分析する。そして、最後に収容された捕虜たちによって制作された番組を解明していく。

捕虜たちが制作・放送に関わった主な番組には以下の物が挙げられる。

① チャールズ・カズンズによるニュース解説（1942年7月31日～）

カズンズは戦前、オーストラリア・シドニーの放送局で有名なアナウンサーであった。当初は日本人が執筆した原稿を読んでいたが、後にカズンズが原稿を執筆し放送した。ニュースや解説の原稿の添削、アナウンスの仕方についてなど、日本人職員の指導にもあたった。

② 「ゼロ・アワー」（1943年3月20日から1945年8月14日まで）

6 これらの日記に記されている10人ないし11人の連れてこられたとされる捕虜、また、1人ないし2人の亡くなったとされる捕虜に関しては、まだ明らかにできていない。

7 本人は戦後、日本人の信用を勝ち得るためにルーズベルトに反対しているように装っていただけであると述べている。“American Who Broadcast For Tokyo Says He Did It ‘To Assist U. S. War Effort’ .”

8 “Full text of ‘United States Court of Appeals For the Ninth Circuit’ .”

参謀本部が企画し、作戦の一部としてNHKに命じたものだが、監督指導はNHKに一任され、参謀本部の事前検閲はなかった。カズンズが企画、アメリカ人のウォレス・インズが司会、フィリピン人のノーマン・レイズ（米比軍の一員として捕らえられ捕虜となったがフィリピン独立後は解放されて捕虜の身が解かれた）がレコードを流すDJ形式で宣伝色は薄かった。「東京ローズ」と呼ばれたアイバ戸栗ダキノなどの日系二世も加わった。20分番組からスタートし、ピーク時には75分番組になった。

③ 「日の丸アワー（後に、ヒューマニティー・コールズ）」（1943年12月2日から1945年8月14日まで。）

午後1時からの30分番組としてスタートした。池田らが約800項目の「対敵宣伝虎の巻」を作成し、分室内の思想統一を図った。最初の約10日間は分室の日本人職員が放送原稿を作成し、捕虜たちが放送した。その後、池田は以下のような宣伝方針を捕虜に与えた。1. この戦争は日本にとって自衛の戦争である。2. この戦争は、欧米諸国の帝国主義に苦しめられている、アジア諸民族の解放の戦争である。3. 各国の独立運動は、歴史的必然であって、なにびともこれを阻止することはできない。そして、捕虜にテーマを与えて原稿を書かせ、複数の日本人職員（日系二世を含む）が検閲した後、捕虜に放送させた。反戦劇も行った。「ゼロ・アワー」はNHKへの「委託番組」であったが、「日の丸アワー」以降は参謀本部の「直轄番組」であった（恒石 1978:176）。

「日の丸アワー」を担っていた池田が1944年2月28日に解任され、「日の丸アワー」は4月1日に「ヒューマニティー・コールズ」と名称を変えた。

④ 「ポストマン・コールズ」<sup>9</sup>（1944年9月18日より<sup>10</sup>。）

録音班を各収容所に派遣し、捕虜による家族あてメッセージを録音して放送した。恒石は「われわれは彼らの家族達を喜ばせ勇気づけるのが目的ではない。このメッセージをサンドイッチの中の肉やチーズとして、そのまわりは反戦的な雰囲気をかますパンの切れで取り巻かなければならない」（恒石 1978:234）と述べている。一方、

『対米謀略放送 「ポストマン・コール」』（2009）では「ポストマン・コール」に関わった2人のアメリカ人捕虜、ドッズとクイレ（本文ではクイリー）を取材している。著者でありNHKのカメラマンであった田中は、実際に放送された番組の台本をドッズから見せてもらい、さらに録音円盤を再生することに成功する。そして、「プログラムは予想外に洗練されていた。全体の印象は、今現在、あちこちのラジオ局で放送しているDJ番組と、何ら変わらない感じである。」（田中 2009:69）と結論づけている。

NHKの北山節郎は、以上4つの番組に加え、メオの *Japan's Radio War on Australia, 1941-1945*（1968）を引用した上で、新たに「ポストマン・コーリング」という番組があった可能性を『ラジオ・トウキョウ』（1988）の中で紹介している。

⑤ 「ポストマン・コーリング」（1944年9月下旬より。）

メオによると、「1944年9月下旬、ラジオ・トウキョウは午後7時から約10分間をイギリス人とオーストラリア人のメッセージ朗読にあてた。各回7人くらいずつのメッセージである。10月20日以降は週2回となり、各回4人か5人になった。最終的には毎週1回の30分番組として統合され、メッセージの数も週に11か12人分となった。この番組は『ポストマン・コーリング』と呼ばれ、カズンズや他のオーストラリア人が本名のまま、まるまる30分間メッセージの朗読にあたった。」（Meo 1968:163）

④と⑤は同時期に開始され、捕虜から家族へのメッセージを放送したという点で共通している。北山は、アメリカ向けが「ポストマン・コールズ」、オーストラリア向けが「ポストマン・コーリング」とネーミングされたと分析し、担当もアメリカ人捕虜がアメリカ向け番組を、オーストラリア人捕虜がオーストラリア向け番組を担当している。

さらに、『NHK戦時海外放送』（1982）によると、「戦前・戦中の放送関係の記録は二回、徹底的に焼却され」（316）たため、「NHKの正史は海外放送の叙述に関して正確さを欠く」（249）側面があり、実は他の番組も制作されて

9 池田は「ポストマンズ・コール」、田中は「ポストマン・コール」、恒石は「ポストマンコールズ」、北山、Fujita及びヘンショーの日記では「ポストマン・コールズ」と名称には統一性がない。

10 池田や恒石は「ヒューマニティー・コールズ」と同時に新番組「ポストマン・コールズ」を始めたとしているが、北山やヘンショーの日記から判断した。

いた余地が残る。

⑥ The Major、Tim、Mickeyによる番組

筆者はNAAに保管されている資料の中から、新たな番組を示唆する資料を見つけた。オーストラリア航空局は、戦後、ケネス・パーキンスが反逆罪に当たるかどうかを調査しており、その資料がNAAに保管されている。その中の「Parkyns, KG LAC 34163」によると、カズンズ、ドゥーリー、パーキンスの3人のオーストラリア人捕虜が、それぞれThe Major、Tim、Mickeyとして登場し、捕虜のメッセージを放送していたと言う<sup>11</sup>。メオによると、⑤では「カズンズや他のオーストラリア人が本名のまま」出演していたということであるが、⑥では出演者は正体を明かしていない。さらに1945年6月30日の⑥の放送ではTim（ドゥーリー）がパーキンスの母親に向けてメッセージを流し、1945年8月4日の放送ではMickey（パーキンス）がドゥーリーの娘に向けてメッセージを流すという周到ぶりである。なぜ、オーストラリアに宛てた捕虜からのメッセージ番組が2つも制作されたのであろうか。しかも、一方は捕虜の正体を明かし、他方は捕虜の正体を伏せていた点には疑問が残る。なお、The Major、Tim、Mickeyによる番組については『ラジオ・トウキョウ』では一切記述がない。また、⑤⑥ともオーストラリア人ドゥーリーが収容された1944年9月7日以降に制作されており、オーストラリア向けの放送を拡充するためにドゥーリーが呼び寄せられたと言える。

また、捕虜たちが番組を通してオーストラリアと双方向でメッセージのやり取りをしていたこともパーキンスの資料から明らかになった。オーストラリア航空局は、パーキンスへの反逆罪の疑いについて、以下を根拠とし、敵に加担していたとは言えず、以降の調査は行わない旨を決定している。その根拠として、パーキンスはオーストラリアが極東の自国捕虜に向けて流したメッセージを傍受しており、1945年6月2日のThe Major、Tim、

Mickeyによる番組の中で、「私は8:15～9:15にメルボルンから放送されるメッセージの番組を聞いています。その番組で私にメッセージを送ってください。」と発信し、6月30日には、「先週金曜日にマーズデン夫人から息子たちに向けたラジオメッセージを聞きました。私へのメッセージはありませんでした。」と発信していた記録が残っていたためである。戦後のインタビューでパーキンスは、オーストラリアがメルボルンからランゲーン経由で捕虜向けに放送したラジオ番組を東京で傍受し、それに対する返事を東京から流す、といったメルボルンと東京間で双方向のメッセージのやり取りをしていたと実際に証言している<sup>12</sup>。

⑦ 「Civiliannaires (シヴィリアン・エヤーズ)」(1945年6月11日より)

ストリーターと、最後に分室に収容されたアンドリュース、グレイザー、タニクリフによる番組である。ストリーターは他の捕虜から日本に協力的であると見られ、度々対立を起こしていた。そのため、自分の番組を持つために上海の収容所で一緒だった仲間を呼び寄せることを要請する。この様子を戦後ストリーターは、「1944年11月、日本人を言いなりにさせ」<sup>13</sup>ていた、と述べている。そして1945年5月17日頃、アンドリュース、グレイザー、タニクリフの3人が分室に到着した。彼らは他の捕虜たちと別棟で「Civiliannaires」という新しい番組を制作し6月11日に放送を開始している<sup>14</sup>。『ラジオ・トウキョウ』には「第三送信（北米向）では、午後1時30分から「シヴィリアン・エヤーズ」という名の番組が登場した。」(北山 1988:236)との記述が唯一残されている。

アンドリュースは戦後、アメリカでのストリーターに対する容疑への証言の中でこの番組について以下のように述べている。

Q. 番組はどのような性格のものであったか。

A. 私が、アメリカにいる家族に向けた捕虜からの手

11 カズンズがThe Majorであったのは、彼が少佐(Major)であったためである。パーキンスはFOOでもMickeyとして登場している。

12 “Kenneth George Parkyns, as Leading Aircraftsman”

13 “American Who Broadcast For Tokyo Says He Did It ‘To Assist U. S. War Effort’ .”

14 捕虜たちの日記では放送時間帯が異なって記載されている。例えばヘンショウの日記には⑦を今までの「ヒューマニティー・コールズ」の時間帯に放送し、それに伴い、「ヒューマニティー・コールズ」と「ポストマン・コールズ」が合体し、「ポストマン・コールズ」の時間帯に放送した、としている。FOOではストリーター達が⑦を「ポストマン・コールズ」の時間帯に放送したとしている。

紙を読んだ。ストーリーターとタニクリフが解説を書いた。グレイザーがプログラムをタイプした。

Q. ストーリーターとタニクリフによって書かれた解説はどのような性格のものであったか。

A. 解説は一般的に戦争を非難するものであり、日本政府やアメリカ政府を非難するものではなかった。

Q. ストーリーターやタニクリフは自らの意思でそのような解説を書いたのか。

A. いや、日本人が何を書くことができ、何を書かなければいけないか指示した。(Andrews)

一方、ストーリーターはこの番組に関して「警備もなく、好きなように、中立的な立場から作った。時々原稿にないコメントを加え日本の軍国主義を非難した。」<sup>15</sup>と述べている。

以上の点からは、彼らの番組内容の特異性は見えてこない。彼らの番組の特色は何であったのか。なぜ、新番組として制作する必要があったのであろうか。

恒石や池田はストーリーターが「Energocracy<sup>16</sup>」という考えを持っていた、と述べている<sup>17</sup>。恒石はストーリーターについて『『地球万物のエネルギーは全世界の人々に平等に分配されるべきもの、これが最終的に平和をもたらす唯一の道』と信じ、ルーズベルト政策には強力なる反対意見を有す』と記している(恒石 1978:198)。さらに池田は、「エナジオクラシイとかいう珍奇な新説をとなえて、ルーズベルト大統領の政策を感情的に攻撃」(池田 1979:78)し、「書くことが極端なので逆効果になると思われ、日の丸アワー放送ではあまり役に立たなかった。」(池田 1979:71)と、相手にしなかった様子を記している。しかし、ストーリーターの考えに理解を示し賛同する日本人が、池田の不在時にいた。

ヘンショーの日記によると、1945年5月21日夜中、フレデリック・スミスがストーリーターの仲間たちが収容さ

れている棟に忍び込んだ。そして日本人タサキ<sup>18</sup>とストーリーターの会話を盗み聞きする。その会話の中で、タサキは「ヒューマニティー・コールズ」がすぐに放送終了になるであろう、そして彼とストーリーターの仲間達が考案中の番組はアジアで一番のラジオショーになるであろう、と話していた。その一方、“Energocracy”のようなラディカルな考えを特集することは、日本が承認していることになってしまう、と高官たちは考えており、ストーリーターの主張する週7日の放送ではなく、週3日しか放送できないとタサキは伝えている。ストーリーターは自分はどの国旗にも、どの制服にも忠誠を払わず、世界市民である、と彼のお決まりの話をし、タサキとストーリーターは自分たちの主張はやがては“Energocracy”を求める大きなうねりとなるであろう、と結んだという(Lt Commander George Herbert Henshaw's diary)。仮に、アンドリュースの証言内の「日本人が何を書くことができ、何を書かなければいけないか指示した。」という日本人がタサキならば、彼らにとって好都合であったに違いない。

以上のことから、この「Civiliannaires (シヴィリアン・エヤーズ)」という番組は、一国家に囚われない世界市民としての新たな社会・経済圏を目指すことを訴えていたことから、他の番組と比べて極めて異色であったと言える。そして、「日の丸アワー」のような参謀本部の「直轄番組」や「ゼロ・アワー」のようなNHKへの「委託番組」どころか、捕虜が自ら人選をしテーマを決め原稿を書き放送する「捕虜主導番組」であったのだ。

パーキンスが⑥の番組内で自国と双方向にやり取りをする、そして、ストーリーターが自分の仲間を呼び寄せ「好きなように」⑦の番組を作り始める、なぜこのようなことが可能であったのだろうか。これら2つの事項は共に1945年6月に起きている。日本国内では6月8日に御前

15 “American Who Broadcast For Tokyo Says He Did It ‘To Assist U. S. War Effort’ .”

16 英文表記は文献によって異なるが、ストーリーター自身が使用している表記を採用した。

17 なお、ストーリーターがこの「Energocracy」という考えを戦後も強く持ち続け、広めようとしていた様子が地方紙に掲載されている。“Local Man Accepts New Position.”

18 『日の丸アワー』には、1943年12月15日から10日間ほどの間に、放送部のスタッフになる日本人職員が4人増員され、そのうちの一人が「田崎花馬」であったと記されている(池田 1979:58)。一方、恒石の日本人職員業務分担リストには「タサキ」や「田崎花馬」といった名前はない(恒石 1978:200-201)。タサキなる人物が誰であったかは現時点では確定できていない。



会議で本土決戦方針が採択され、25日には沖縄戦終了の大本営発表がされた。このような戦況下で駿河台分室でも人事の入れ替わりが起きている。参謀本部第二部第八課は縮小され恒石が四国軍管区参謀として高知へ、「駿河台技術研究所」の所長であった藤村信雄や日本人職員も古巣の職場へ戻ったり、疎開のために去って行った。この時点で既に対敵謀略放送組織が崩壊し、効力を失っていた可能性が高い。そんな中6月15日に今一度分室に呼び戻された池田は「ふたたび俘虜放送をする情熱などわかかなかったけれども、自分があれほど精魂を打ち込んで始めた仕事の後始末だから、仕方ないと思って引き受けることにし」(池田 1979:133)たとし、ドイツが降伏の日まで、平然としていつものように宣伝放送を続けていたため日本でも俘虜放送をいつまでも続けなければいけないと考えたとしている。対敵謀略活動への日本側人員が減らされていく中で、協力者と見うけられる捕虜を優遇することで、なんとか最後まで謀略放送を試み続けようとした状況が読み取れる。

## 5. 捕虜たちの意識

捕虜たちはどのような意識でこれらの謀略放送に関わっていたのだろうか。

前述の通り、捕虜たちは、謀略放送に役立つと思われる者たちが各收容所から選出され、駿河台分室に寄せ集められた。そのため、戦時期の部隊ごとに收容された他の收容所のような、共に戦闘を乗り越えてきた仲間意識がある集団ではない。国籍も部隊も階級も異なる者たちが呼び寄せられ、初めて顔を合わせ、そして共同生活することになったのである。

フジタはFOOの中で、互いに誰も信じられない、疑心暗鬼の様子を綴っている。例えば、彼は終戦間際に脱走を計画するわけだが、1年半も分室で生活を共にしていたにも関わらず、一緒に連れて行く人物、信頼に足る人物を捕虜たちの中から見つけられず悩み苦しんでいる(Fujita 1993:225)。また、終戦後すぐ、ストーリーターと

プロボーを日本軍の協力者として逮捕するよう他の捕虜たちが差し出すなど、他の收容所では見られない行動も起きている。謀略放送に従事する、という肉体労働とは違った知的労働に従事させられていたが故での特徴だと言える。

このような一様でない人間関係の中でも、将校たちの間では共通見解を定めていたようである。シェンクは、カズンズが6人の将校たちを集めて話し合いをし<sup>19</sup>、次の3つの取るべき道の中から多数決をとったと証言している。

I. 謀略放送従事を「脅迫」と捉え、実行する。(我々の政府は我々の境遇を理解するであろう。)

II. 台本をごちゃまぜにしたり、どもるなどして、可能な限りラジオ・トウキョウの放送をサボタージュする。

III. IIのようにサボタージュし、さらにラジオ・トウキョウを日本人に対する武器として利用する。すなわち、連合国に対して、可能な限り全ての情報を流す手段として放送を利用する。捕虜收容所の実情、日本の政界あるいは市井の様子、船の動向などを言い回しや二重の暗喩などを使って伝えることを試みる。

5人がIIIの選択肢を選び、遅れて收容された2人はIの選択肢を選んだものの5人に協力するとした。その後、カズンズが一人一人が行うべき様々な方法について説明した(Mark Streeter)。そして、できるだけ多くのダブルミーニングを原稿に混ぜようと努力したとしている<sup>20</sup>。

しかし、このIIIの選択肢が一枚岩で行われ、機能したとは言い難い。捕虜のうちの一人、エドウィン・カルプフライシュは、隠し言葉を原稿に埋め込んだり、「日の丸アワー」の放送中に文章の意味を変えて読むなどしており、これらのサボタージュが発覚し、1944年3月28日に分室から追放されている。ヘンショーの日記によると、カルプフライシュのサボタージュを密告したのはプロボーであり、プロボーは自ら密告を認めた上で、番組制作に協力しないと同じような目に遭うぞ、と他の捕虜たちに言い放ったという(Lt Commander George Herbert

19 マックノートン、ヘンショー、シェンク、カズンズ、インス、コックス、ワイズナーの7人。コックスとワイズナーが含まれていることから、1944年1月7日以降のこととみられるが、日には定かではない。

20 シェンクらが行った様々な具体的方法については上坂の中で紹介されている。

Henshaw's diary)。このように、捕虜のサボタージュは、捕虜からの密告によって日本側の知るところとなった。一方、カルブフライシュ以外の他の捕虜によるサボタージュに関しては、日系二世職員の中には見破っていた者もいたものの、恒石や池田の資料を読む限りは気づかれていなかったようである。日本側は幾重にも渡って検閲をしていたはずなのであるが、捕虜たちのサボタージュを自ら見抜くことができていなかった。カルブフライシュの追放は、捕虜たちの間の不協和音と、日本側の謀略活動を統制する能力の脆弱さという2点を露呈した出来事と言える。

## 6. まとめ

本稿では参謀本部駿河台分室を再考し、最後に収容された知られざる3人の捕虜たちを明示した。さらに、「ゼロ・アワー」や「日の丸アワー」以外に実に多様な番組が制作されており、その番組制作の裏で捕虜たちによって秘密裡に幾つもの活動が行われていたことを明らかにした。今回は、謀略放送が孕む重層的な側面を浮き彫りにしたところで筆を置くこととする。駿河台分室の持つ今日的な意味については引き続き考えていきたい。

## 参考文献

- ・ “American Who Broadcast For Tokyo Says He Did It ‘To Assist U. S. War Effort’ .” *The St. Louis Star and Times*, Thurs, Sep 13, 1945. p.5.
- ・ Andrews, Arthur Dale, RG 60 Entry A1 1083, Select Subject Files Relating to Investigations of Alleged Treasonable Utterances by Mark Lewis Streeter Released Under the Nazi War Crimes and Japanese Imperial Government Disclosure Acts, 1945-1951, Box 1, Pfc, National Archives and Records Administration.
- ・ Fujita, Frank. *FOO, A Japanese American Prisoner of the Rising Sun: The Secret Prison Diary of Frank ‘Foo’ Fujita*, University of North Texas Press, 1993.
- ・ “Full text of ‘United States Court of Appeals For the Ninth Circuit’ .” *The Internet Archive*. [https://archive.org/stream/govuscourtsca9briefs2604/govuscourtsca9briefs2604\\_djvu.txt](https://archive.org/stream/govuscourtsca9briefs2604/govuscourtsca9briefs2604_djvu.txt) (30 Nov. 2019)
- ・ Howe, Russell Warren, *The Hunt for ‘Tokyo Rose’*, Madison Books, 1990.
- ・ “Kenneth George Parkyns, as Leading Aircraftsman, Now 20 Squadron RAAF, and a prisoner of the Japanese 1940-1945, interviewed by Margaret Evans.” *Australian War Memorial*. <https://www.awm.gov.au/collection/C1008214> (30 Nov. 2019)
- ・ “Local Man Accepts New Position.” *Daily Republican-Register*, Wed, July 17, 1946. p.3.
- ・ Lt Commander George Herbert Henshaw's diary [filmed copy], prosecution of [Major] Charles Hughes Cousens [30 November 1943 - 29 August 1945] [Common law series, Deputy Crown Solicitor, NSW] [box 625], NAA: SP185/1, 42044 PART 21.
- ・ Mark Streeter, LS 09836-09838, SP01898、国会図書館憲政資料室。
- ・ Meo, Lucy. *Japan’s Radio War on Australia, 1941-1945*, Melbourne University Press, 1968.
- ・ Parkyns, KG LAC 34163- Report re investigation of broadcast from Tokyo, NAA: A705, 182/1/395.
- ・ POWs at Camp Bunka, List of, RG 60 Entry P 1083, Select Subject Files Relating to Investigations of Alleged Treasonable Utterances by Mark Lewis Streeter Released Under the Nazi War Crimes and Japanese Imperial Government Disclosure Acts, 1945-1951, Box 6, Pfc, National Archives and Records Administration.
- ・ “Tokyo Main Camp Oomori.” *Center for Research Allied POWS Under the Japanese*. [http://www.mansell.com/pow\\_resources/camplists/tokyo/omori/omori.html](http://www.mansell.com/pow_resources/camplists/tokyo/omori/omori.html) (30 Nov. 2019)
- ・ 池田徳真、『日の丸アワー』、中公新書、1979。
- ・ 海外放送研究グループ編、『NHK戦時海外放送』、原書房、1982。
- ・ 上坂冬子、「対米謀略放送の裏をかいた男」、『中央公論』、1978年1月号。
- ・ 北山節郎、『ラジオ・トウキョウ』、田畑書店、1988。
- ・ 田中高久雄、『対米謀略放送 「ポストマン・コール」』、幻冬舎ルネッサンス新書、2009。
- ・ 恒石重嗣、『大東亜戦争秘録—心理作戦の回想』、東宣出版、1978。
- ・ 名倉有一編、『駿河台分室物語』私家版。
- ・ 並河亮、『もうひとつの太平洋戦争 戦時放送記者がいま明かす日本の対外宣伝戦略』、PHP研究所、1984。
- ・ 濱本純一、『青雲白雲 私の人生劇場』、第一製版印刷、1986。
- ・ 村山有、『終戦のころ—思い出の人々—』、時事新書、1968。